『新墾』24-1号

ふる里の母を偲べばこの宵のうらがなしさを木枯のふく

二歩三歩あるき初めにし足どりの子の危うさを言ひ出でにける

花さかる春を半ばにみましかりしみ魂さくらの歌詠むらむか

やみ臥りいませる君とゆくりなく語らふ午後の春極らんとす

『新墾』24-2号

個性よりはげしく咲きて白菊の時代に化する花と見えたり

白菊の夜の悶えをふと思い編む手を休めて又編みつゞく

だりやならば何れに咲かむしづかなる秋のひと日のつましきおごり

洋農より和服を好むと夫の言いつ結ぶネクタイがけさは赤すぎる

しづかなる冬夜はむしろ味気なき野積み石炭のくずるるもよし

『新墾』24-3号

玻璃窓に春陽かげろひくりやべの水瓶の氷のしづかにとくる

冬畑の枯黍の葉はひもすがら寒の極みの風に吹かるる

ふる里は空一ぱいの夕茜子の頬よりも濃きその色に

南天の紅き実こぼるるこのタべしづかに女の一生(よ)おもはる

指に染み

『新墾』24-4号

人を憎むはげしき抵抗にうちかてず真夜はかなしと吾をつゝめり

あめ色の灰皿のみの室しき部屋よ温度計のついに昇ることなく

生活の潤ほひとならぬ紅き造花挿すをためらいぬ心うずく日なれば

蒼一つつけたる寒椿咲くは何色明日の開花のしきりと待たる

紅生姜お指の染みて紅ければ愛しと云はむ三十路の春を

『新墾』24-5号

編みをれば春の睡魔の襲ひ来てすべなく午后の畳につゝ伏す

ひたくと破れ障子が風に鳴り春夜の吾は囁かれてはをらず

屋根つたふけものの音にも春の夜のみだれしゐずまひ直して坐る

恵まれぬ倖うすき過去の日よくり返すことのなき日記をとづる

雪の夜にふとももらせし歎息の壁にひゞきて孤愁はつのる

プロフイル

『新墾』24-7号

たやすくはゆるされまじく罪の如この暴風に耐ふる夜すがら

手鏡もて鏡に映すプロフイルのとりすませし私に何んの價値がある

下げ髪の少女がレース編みて汽車待てりその間も香る白きうなじは

寂しくて頬寄するとき芍藥は泪の花粉こぼす闇に眞白く

或時は訴へ或時は求め夜すがらを戀鳴く猫は眠りをしらず

『新墾』24-8号

黒いドレスの吾に黄の蝶舞ひ来たり吾をしきりに飾る夢など

吾が胸より何時失せたりし黒いブローチ拾はれて誰が胸を飾らむ

数滴のミルクが珈琲の色を変へる夜互に妥協よせて坐しゐる

押し上ぐるポンプの重さは心病む今朝の疲労とたちまちかはる

破れたる夢再びとあじさゐの咲く庭に一人たちつくしつつ

『新墾』24-9号

しきりと反抗もちたき日よ針差の針ことごとくさかしまにさす

屋根をうつ細き雨音も絶へしめて人思ふ夜は静にひとり

真実はつひにつきつめられず帰り来て丹念にに帯の徴をのばせり

思ふことの一つ一つが消されゆくこの騒音の巷に住みて幾年

『新墾』24-10号

石刻む音ひもすがら限りなくつづけば不思議にいら立ちもなく

花と云ふ花みな活けてみたき日のありテーブルセンターに映る茶の壺

ぬかるみに足をとられたるは記憶になく覚つかなくも歩み来にしに

一匹の蛾にこゝろとらはれてさむ〻くと別れの言葉思ひ出さず

細き君がみ手よりおくらるゝ扇の風よかたえの菊がにはかに香る

『新墾』
24-11
号

真向える真紅の花に阿思はむセータ編む毛埃の吾になじまず

靄(もや)こむる夜の鋪道にすれ違いし人の体臭のやさしき香り

ほの晴く部屋を灯せるスタンドを消せば又明日へのつながりを持つ

くりやべの窓に挿したる緋ダリヤにもかろき妬みの湧けるは何故

『新墾』
24-12
号

鮮かにキャベツを刻むくりやべは既に保たれし位置かと思ふ

ドア固く閉ざして意固地なるものに吹く風もやがて冬の足音ならむ

誰一人頼りにならずとぼくと吾が影抱き帰り来る道

近づけば余りにも強き菊の香に酔ひるてまどう離れがたきに

抱(いだ)かれてやり場なき心の方角よ匂える菊に酔ひて眠らむ